

平成27年度病害虫発生予報第6号

平成27年8月5日  
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	平年並	平年並
		紋枯病	—	平年並
		ニカメイガ	やや早い	少ない
		セジロウンカ	—	やや少ない
		トビイロウンカ	—	やや少ない
		斑点米カメムシ類	—	多い
		コブノメイガ	平年並	やや少ない
		フタオビコヤガ	—	少ない
	ダイズ	紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	平年並	やや多い
カメムシ類		やや遅い	やや多い	
果樹	ナシ	黒斑病	—	やや少ない
		ハダニ類	—	やや多い
		シンクイムシ類	平年並	平年並～やや多い
	カキ	うどんこ病	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	平年並
		カキノヘタムシガ	平年並	平年並
共通	カメムシ類	—	平年並	
野菜	ネギ	軟腐病	平年並	平年並
		白絹病	平年並	やや多い
		黒斑病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	平年並	平年並
		ネギアザミウマ	平年並	平年並
		シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
		ナガイモ	炭疽病	平年並
	ナガイモコガ		平年並	やや多い
	ハダニ類		平年並	やや多い
	シロイチモジヨトウ		平年並	平年並
	キャベツ・ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年並	平年並
		ハイマダラノメイガ (ダイコンシンクイムシ)	平年並	やや多い

## 気象予報（抜粋）

1 か月予報（8月1日～8月31日：7月30日 広島地方気象台発表）

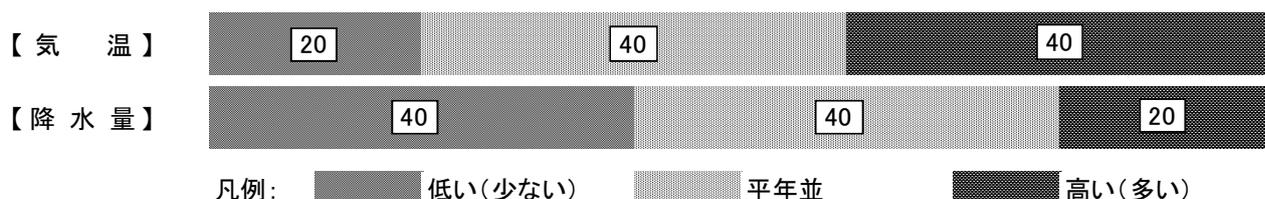
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年より晴れの日が多いでしょう。

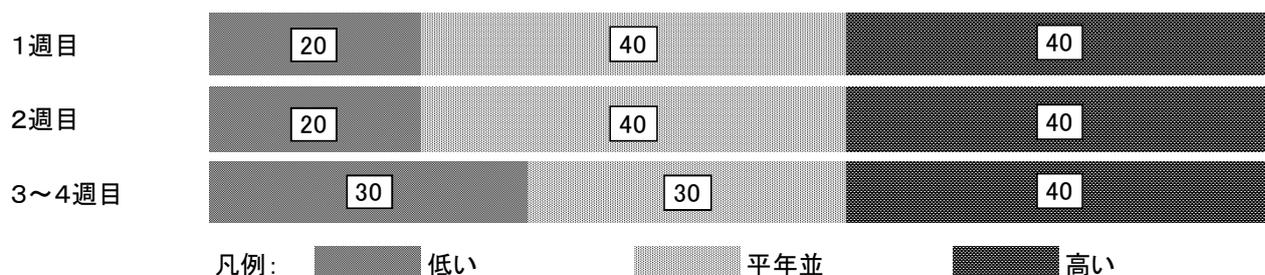
向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

### <向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



### <気温経過の各階級の確率(%)>



## 普通作物

### [イネ]

#### 1 いもち病（穂いもち）

##### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 8月1日現在、山間地等の常発地を中心に葉いもちの発生が認められているが、県全体の発生ほ場率は23.3%と平年並である（平年：21.4%）。

イ 7月下旬現在、水稻の出穂期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、平年より晴れの日が多いと予想されており、本病の発生量は平年並と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 穂いもち防除は予防防除を基本とする。なお、中間地～山間地等の葉いもちの発生の多い地域では、穂いもちの多発生が懸念されるので、防除を徹底する。

イ 粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に散布する。

ウ 出穂していない中生品種などで粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布する（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されてい

る止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める)。  
エ 本県では、ストロビルリン系薬剤耐性菌が発生しているので、本系統薬剤の使用を控える。

## 2 紋枯病

### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域  
発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 8月1日現在、県予察ほ場(農業試験場)における発生は、平年よりやや少ない。

イ 7月下旬現在、水稻の茎数は平年よりやや多く推移しており、本病の発生に助長的である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、病虫害防除指針などを参考にして追加防除を行う。

## 3 ニカメイガ(第2世代)

### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域  
発生時期 やや早い  
発生量 少ない

### (2) 予報の根拠

ア 予察灯における総誘殺数は平年より少ない。

イ 8月1日現在、現地ほ場における第1世代幼虫の発生は平年より少ない。

ウ これまでの発生状況および向こう1か月の気象予報から、本種の発生時期はやや早く、発生量は平年より少ないと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、7月末から8月上旬に心枯茎率1.5%以上又は被害株率10%以上の場合、8月中旬(第2世代幼虫の発生最盛期)に防除を行う。

## 4 セジロウンカ

### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域  
発生量 やや少ない

### (2) 予報の根拠

ア 7月第6半旬現在、予察灯への総誘殺数は平年よりやや少ない。

イ 8月1日現在、現地ほ場における発生は平年よりやや少ない。

ウ これまでの発生状況および気象経過から、本種の発生は平年よりやや少ないと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

要防除水準(成幼虫数10頭/株)を超えているほ場では、病虫害防除指針などを参考にして、粉剤などで直ちに防除を行う。

## 5 トビイロウンカ

### (1) 予報の内容

発生地域 平坦部（特に沿岸部）

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月第6半旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。

イ 8月1日現在、現地ほ場での発生は認められていない。

ウ これまでの発生状況および向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年よりやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度に注意し、今後の病虫害発生予察情報を参考にする。

イ 8月中旬頃の要防除水準は、成幼虫数1頭/株である。要防除水準を超えた場合は、病虫害防除指針などを参考にして、粉剤などで防除を行う。

6 斑点米カメムシ類（平成27年8月3日付、病虫害発生予察注意報第1号発表）

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 7月31日現在、水田周辺のイネ科雑草では、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなどの発生量が急増している。特にアカスジカスミカメの発生は平年より多く、高密度（5往復10回振りすくい取り虫数500頭以上）で発生している地点が散見される。

イ 7月31日現在、早植え、極早生品種等、すでに穂揃い期を迎えた水田における本種の発生ほ場率及び、要防除水準を超えているほ場率は平年より高く、発生量は平年より多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類のイネへの加害活動及び増殖に好適な条件になると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

病虫害発生予察注意報第4号を参照。

7 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月1日現在、現地ほ場における発生は平年より少ない。

イ これまでの発生状況および向こう1か月の気象予報から、本種の発生時期は平年並、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいため、発生が多いほ場では、幼虫発生初期（8月第2～3半旬頃）に病虫害防除指針などを参考にして粉剤などを散布する。なお、粒剤で防除する場合は、発蛾最盛期（8月上旬頃）に散布を行う。

8 フタオビコヤガ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 少ない

## (2) 予報の根拠

- ア 8月1日現在、現地ほ場における発生は、平年（H18～26）より少ない。
- イ これまでの発生状況および向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される。

## (3) 防除上注意すべき事項

- ア 早生品種栽培ほ場で発生が多い場合は、穂ばらみ期～穂揃い期に防除を行う。なお、この時期は他の病害虫の防除時期と重なるので、本種にも登録のある殺虫殺菌剤などによって同時防除を行う。
- イ 中生品種等、8月中旬以降に出穂するほ場では、本種の発生状況に注意し、要防除水準（暫定版：次の①～③の条件をすべて満たす場合、①発生の主体が1. 2cm以上の幼虫、②被害株率90%以上、③食害葉面積率10～20%以上）を超えた場合は、直ちに防除を行う。

## [ダイズ]

### 1 紫斑病

#### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

#### (2) 予報の根拠

- ア 大豆の成熟期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。
- イ 向こう3か月の気象予報から、本病の発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

- 病害虫防除指針などを参考にして、開花期の25～30日後に、粉剤又は水和剤を使用して防除を行う。

### 2 ハスモンヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや多い

#### (2) 予報の根拠

- ア フェロモントラップによる6月～7月の総誘殺数は、平年よりやや多い。
- イ これまでの発生状況および気象経過から、若齢幼虫による被害は、平年並の8月第2～3半旬以降に発生し始めると予想される。
- ウ これまでの発生状況および向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年よりやや多いと予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために、表皮が残り白変葉となる。発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺（葉ごとの切除）あるいは粉剤などのスポット散布が有効である。
- イ 老齢幼虫に対する薬剤の効果は不十分であるため、早期発見と早期防除に努める。

### 3 カメムシ類

#### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
------	------

発生時期 やや遅い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月第6半旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数は平年並である。

イ 大豆の開花期は平年よりやや遅いことから、本種の発生時期は平年よりやや遅いと予想される。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年よりやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫防除指針などを参考にして、開花期の25～30日後と、その10日後に、粉剤などを使用して防除を行う。

## 果 樹

### [ナ シ]

#### 1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月24日～30日に行った巡回調査の結果、県内の平均発病果率は1.5%（平年：2.8%）、新梢葉の平均発病葉率は1.2%（平年：2.8%）と、いずれもやや低かった。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、8月上旬にアリエッティC水和剤800倍液、8月中～下旬にアミスター10フロアブル1,500倍液又はストロビードライフロアブル3,000倍液を散布する。

#### 2 ハダニ類（カンザワハダニ，クワオオハダニ，ナミハダニ）

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬に行った巡回調査の結果、ハダニ類の発生量は、平年と比較するとやや多い。

イ ハダニ類の発生密度が高く、葉焼け症状を呈しているほ場が一部で認められている。

ウ 向こう1か月の気象予報は、ハダニ類の増殖に好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ クワオオハダニにはダニゲッターフロアブル2,000倍液などを、カンザワハダニ及びナミハダニには前述の剤に加えてマイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。

### 3 シンクイムシ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並～やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 7月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数はほぼ平年並であるが、一部の地域ではやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）は、平年並の8月中下旬頃から発生すると予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 発生が多い園ではシペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2,000倍液又はイカズチWDG1,500倍液）、テルスターフロアブル3,000倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

## [カキ]

### 1 うどんこ病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量はほぼ平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液、8月下旬にストロビードライフロアブル3,000倍液などを散布する。

### 2 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量はほぼ平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液、8月下旬にストロビードライフロアブル3,000倍液などを散布する。

イ 現在、発病の認められている新梢及び果実は、見つけ次第取り除く。

### 3 カキノヘタムシガ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月第5半旬現在、県予察ほ場（河原試験地）の予察灯への誘殺は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、第2回成虫の発生盛期は平年並の8月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスミチオン水和剤40の1，200倍液などを散布する。多発園では8月中旬頃にアグロスリン水和剤2，000倍液などを追加散布する。なお、スミチオン水和剤40の使用時期は収穫前45日である。

[共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月中旬現在、カメムシ類の誘殺数は平年並～やや少ない。

イ 7月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋）において、カメムシ類の果実被害は認められていない。

ウ 向こう1か月の気象予報は、カメムシ類の加害活動に好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

エ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

## 野菜

[ネギ]

1 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギが傷つくような無理な土寄せ及び追肥などの作業で発病が助長されるので注意する。

イ 最終土寄せ前にナレート水和剤1，000倍液を散布する。土寄せ後にコサイドDF1，000倍液又はZボルドー500倍液を7～10日間隔で2～3回散布する。

## 2 白絹病

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多く、一部で多発ほ場が認められる。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続きやや多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

8月に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2，000倍液を株元に散布する。

## 3 黒斑病

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1，000倍液、ポリベリン水和剤1，500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1，000倍液などを散布する。

## 4 ネギハモグリバエ

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、粒剤ではベストガード粒剤6kg/10a株元処理、ダントツ粒剤6kg/10a株元処理、散布剤ではアグロスリン乳剤2，000倍液、ディアナSC2，500～5，000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）400倍液0.4L/m<sup>2</sup>の株元灌注も有効である。

## 5 ネギアザミウマ

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、粒剤ではベストガード粒剤6kg/10a株元処理、ダントツ粒剤6kg/10a株元処理、散布剤ではハチハチ乳剤1,000倍液、ディアナSC2,500~5,000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）400倍液の0.4L/m<sup>2</sup>株元灌注も有効である。

イ 同一、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場における幼虫の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、プレオフロアブル1,000倍液、マッチ乳剤2,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 8月上旬現在、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 8月の薬剤防除には、ダコニール1000の1,000倍液（ムカゴにも登録あり）、ジマンダイセン水和剤400~600倍液などを予防散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場における幼虫の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本虫は、高温乾燥条件及び風通しの悪いほ場で被害が増加するため、早期発見に努める。
- イ 防除薬剤は、アタブロン乳剤2,000倍液（ムカゴにも登録あり）、フェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液（ムカゴにも登録あり）またはプレバソンフロアブル5の2,000倍液などを7～10日間隔で散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場におけるハダニ類の発生量はやや多い。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 高温乾燥条件で発生が増加する。薬剤防除は、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので丁寧に散布する。
- イ 防除薬剤は、コテツフロアブル2,000倍液（ムカゴにも登録あり）、コロマイト乳剤1,000倍液（ムカゴにも登録あり）などを使用する。

4 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを使用する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 夏季の高温乾燥条件で多発しやすい。また、中齢幼虫以降は薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期の防除を徹底する。
- イ キャベツの防除薬剤は、トルネードエースDF2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの防除薬剤は、ディアナSC2, 500～5,000倍液などを散布する。

## 2 ハイマダラノメイガ (ダイコンシンクイムシ)

### (1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における幼虫の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は高温少雨、残暑の厳しい年に多発生し、内部の未展開葉や生長点部が食害されるので注意する。

イ 育苗施設では、防虫ネット被覆（網目1.5mm以下が好ましい）を実施し、害虫の侵入を防ぐ。

ウ キャベツの防除薬剤は、プリンスフロアブル2,000倍液、BT剤（エスマルクDFの1,000倍液など）、ディアナSC2,500～5,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液などを散布する。

エ ブロッコリーの防除薬剤は、BT剤（チェーンアップ顆粒水和剤2,000倍液など）、プリンスフロアブル2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。**

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。( <http://www.famic.go.jp/> )

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第7号の発表は、8月19日（水）の予定です。